

瀋陽駐在員事務所

北海道物産展 in 瀋陽伊勢丹

3月12～18日、瀋陽伊勢丹で「北海道物産展」が開催されています。ここ瀋陽でも『北海道』の知名度は抜群です。とくに「食」、「温泉」、「雪（スキー）」などに人気が集まっています。しかしながら輸入関税等があり、販売価格は日本の2倍以上のものもみられます。例えば、ぼん酢（300ml）800円、イクラ醤油漬（100g）2300円、ドラ焼き1個400円、函館生ラーメン1個500円など、日本の奥様なら「エーッ！！」と言って絶対に手を出さない価格ではないでしょうか。「天下の伊勢丹さんが、なんて無謀なことをするんだっ！」と驚かれる方も多いでしょう。しかし、瀋陽の富裕層にとっては十分に手の届く価格なのです。北海道人でありながら、北海道物産展でお買い物ができない小生にとっては、真に羨ましいかぎりです・・・。

正司 毅



ユジノサハリンスク駐在員事務所

スキーで出会った男の子

ユジノサハリンスクでは、市内に最新のゴンドラ・リフトを備えたスキー場があり、毎日夜10時までナイター営業をおこないなかなかの賑わいですが、クロスカントリースキー（歩くスキー）もそれ以上の人気で、週末は市内に数箇所ある専用コースで老人から子供まで幅広い年齢層のロシア人が楽しんでおります。料金も手軽で用具も一式借りられるということなので、ためにしに体験してきました。

用具一式（靴・板・ポール）をレンタル小屋で借りスキー靴に履きかえ、外に出てさあ出発と思いきや何度試してもスキー靴がスキー板に装着できません。こちらは歩くスキーは始めて、モタモタしていると小学生くらいの可愛い男の子（帽子をスッポリかぶっていたので、最初は女の子と間違えました）が「日本人か？」と話しかけてきて、友達と一緒に手伝ってくれようとしています。少年4～5人に足を持ち上げられ、「もっとクツをナナメに。」とかなんとか言われながら手を尽くしましたが、うまくいきません。しばらくすると、その男の子ヴァーニャ君が私の手を引っ張って、レンタル小屋まで一緒に来いと言う。皆でゾロゾロついて行くと、私が借りたスキー板とスキー靴を係員に見せながら何かを強い口調で訴え、結局靴も板も取替えてくれました。どうやら最初に借りた靴と板は種類が違いため、そもそも装着できないということだったようです。再び外に出て試すと今度は一発で装着、みんなで歓声をあげたあと手を振って別れました。ところが、ヴァーニャ君だけ帰りません。何かと顔を覗き込むと、彼は少しテレながら言いました、「お手伝いしたから、50ルーブルちょうだい・・・。」

その言い方もキュートでしたし、私としても一人異国の地で途方に暮れていたところを助けてもらった感謝の気持ちが大きかったので、こころよく進呈いたしました。そして、お互い手袋を取って固い握手をして別れたのでした。ロシアの子供はかわいくて、そしてとてもしっかり者です。

中川 文敏



(財)日中経済協会北京事務所

さようなら 北京

3月は別れの季節です。ですが小職は来年度も引き続き北京にいる事になりました。今後とも宜しくお願い致します。然しながら、中国で地方から都会に出て働いている人達は、旧正月（春節）を境に田舎に帰る人が続出します。中国の方にとって旧正月を田舎の家族と過ごす事は日本以上に重要で（日本の大晦日・元旦と比較して）、帰りの切符を買う為に朝4時から並んだり、血のにじむような思いをしてまでも田舎に帰ります。

そしてそのタイミングで、北京や上海を卒業する人が年々増えている様です。以前にも不動産バブルについて触れましたが、都会は物価が目に見えて高くなっており、我々駐在員も以前の日中の物価の違いを享受できる幅がどんどん小さくなっています。ましてや、月4～5万円が平均月収の現地の人達であれば尚更住みにくくなっている現状です。また日本と同様、雇用の機会が不足している現状であり、理想と現実の違いを感じている方が非常に多いです。馴染みの人達がいなくなる度、寂しい気持ちになるのです。

中島 康成

